僕らの恋模様　～恋って何？～

トムトム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕らの恋模様　～恋って何？～

【Ｎコード】
Ｎ１７４４ＢＡ

【作者名】
トムトム

【あらすじ】
間違って前作を短編小説にしていしまいました。実際には前作の続きです。
恋を知らないリョウはどんな恋をするんでしょう？

初恋以前１（前書き）

恋ってどうしたらできるの？

初恋以前1

「おはよう。昨日も仲良かったわけだ」
昨日なかなか寝付けなかったのを両親の夫婦生活のせいにしてみた。
「何のこと？リョウ」
「お肌がツヤツヤですけど？ごまかすなよ。夫婦なんだからさ」
俺は当たり前のこととして気にもしないで言う。
「あははは…気をつけるね」
母さんは一応気にしているみたいだ。
「俺も高校生だし、二人で旅行に行ったら？」
今度の連休で行ってくれ。俺はその間はリフレッシュする。

「本当？リョウ？でも今度の連休明けは締め切りがあるんだよね」
母さんはコーヒーをのんびりと飲んでいる。
「…詰まってるの？」
「平気よ。好きでやっている仕事だもの」
コーヒーをテーブルに残して、母さんはまたリビングの片隅のパソコンデスクについた。
母さんは、翻訳家と小説家だ。最初は翻訳をメーンにしていたらしいが、
趣味で書いていた小説が編集者の目に留まって小説家デビューをした。
以来、ティーンズ小説を中心に活動をしている。
なので、子供は俺しかいないのに、本棚にはティーンズ小説やティーンズ雑誌が溢れてる。

俺は手早く朝食を食べて自分で片付ける。母さんの仕事もあって基本的に自分でできることは
自分でやることにしている。家庭科全般は無難にこなせるようにな

った。
いつでも、家庭科が苦手な彼女ができても俺ができるから大丈夫だ。
で、今はお弁当用に卵焼きを焼いている。
「母さん、お昼はお弁当でもいいの？」
「そうしてくれると嬉しいなぁ」
画面とにらめっこしている母さんののんびりとした声がする。
父さんと母さんは、初恋同士で結婚したと聞いている。
母さんに恋愛相談と称してくる学校の女の子には慣れ染めを教えているのに
俺には一切教えてくれない。
現役女子高生とガールズトークで新作の構想を練るのに都合がいいんだって。
大手ＳＮＳでもやり取りをしているそうだ。

「じゃあ、今日の放課後は来てもらわないようにしたら？スーパーで欲しいものはメールして」
俺は自分の分と母さんの分の弁当を作って弁当袋に詰め込んだ。
「ありがとうね。リョウ。…まだ初恋の君は現れない？」
「…まだだね。ねぇ、恋ってするのも？それとも…違うの？」
「それは…その人次第よ。気が付いたら恋だったりするし、落ちる事もあるし」
「そっか。じゃあ俺はその時を待っていればいい訳か」
「そう。リョウはいい子なんだから、そのままでいればいいのよ？分かる？」
パソコンに向かっている母さんが俺を手でおいでと呼ぶ。
「ん？」
「私と裕貴の自慢の子なんだから。光源氏な訳ないでしょ」
「気にしてねぇよ。そんなこと。じゃあ、行って来るよ」
俺は玄関を開けて外に出た。

家の前の交差点は赤信号を指している。青に変わるまで庭にいていいか。

親って子供の悩みが分かるんだなぁとちょっとだけ感心していた。

初恋以前１（後書き）

あらすじに書いた通りです。

他のシリーズのような展開には一切なりません。

初恋以前2

裏門からの登校は自転車通学者か、先生か裏門が近い生徒に限られる。
俺もそんな一人だ。そんなせいか、毎朝見る顔ぶれはほとんど同じといってもいい。
信号が赤い間は俺は庭で待つことが多い。信号は門の前だが、学校の生徒が多くて
通行する人の邪魔になってるなぁとある時、考えたことがあってからだ。
以来、俺だけはそうしている。

「ちょっと、よそのお宅に何入り込んでいるのよ」
俺はいきなり腕を引かれて通りに出された。そこには俺より低い同じ制服を着た女の子がいた。
「えっ、何の事かな？ここは俺の家でもあるんだけど」
リビングのカーテンは開け放されていて、俺と女の子を見ている母がコーヒーカップを持って
眺めていた。
「あそこにいるの、俺の母親。似てるだろう？」
俺は女の子に母さんを指さして言った。
「そうみたいね。ごめんなさい、私…知らなくって」
女の子は赤くなってうつむいてしまった。恥ずかしいんだろうな、思い切り。
「今度会っても怒らないでくれよ」
俺は努めて彼女に言った。彼女の勘違いだから、そこまで謝って欲しくない。
ちっちゃい女の子が必死に謝れると、俺の方が悪く思われるんじゃ

ね？

「はい、あなたの名前は？名字は田中君だよね」
彼女は門の表札を見て言った。そう、俺は田中諒という。
けれども、子供の頃から名字で呼ばれることはほとんどない。
諒と呼ばれることが多いんだけど、俺のイメージ的にはカタカナ表記なんだよな。
「そうだね、名前はリョウ。皆もリョウって呼ぶから君もリョウって読んでいいよ」
「分かった。リョウ君。はじめまして。私は山川りおと言います」
彼女は律儀に胸ポケットに入っている生徒手帳を見せてくれた。
「りおちゃんね。可愛い名前だね。川が二つ続いちゃうから平仮名なのかな？」
確かポルトガル語だったよな。なんとなく俺は思い出していた。

「よく知っているんですね。初めてです。そうやって言われたの」
りおちゃん（さんってイメージじゃないんだ。申し訳ないけど）は目をキラキラさせて
俺に言った。
「偶然だよ。信号変わったよ。行こうか」
そうして、俺とりおちゃんは裏門に入って行って別れた。
りおちゃんは友達と待ち合わせだったようだ。

りおちゃんは、８組と生徒手帳に書いてあったから１組な俺との接点はない。
だから俺の名前も知らなかったんだろう。知っていたらどういう反応をしたんだろう？

あれ？俺今までそんな事考えたことないや。なんでかなぁ？
母さんが朝食の時にあんなことを聞いたせいで意識したんだろうな。
俺はそんなことを考えながら昇降口に向かって行った。

初恋以前２（後書き）

ちょこっとだけ、女の子を意識していますが、親に煽られたせいにしています。
本当のところはどうなんでしょう。

初恋以前３（前書き）

リョウとりお目線を一気に書き込みます。

初恋以前3

ｓｉｄｅ　りお

「おはよう。さつき」
「りお、ちょっと見たわよ。大丈夫？」
自転車置き場で自転車を置いている同じクラスのさつきに私は近づいた。
「えっ、何が？」
「何がじゃないわよ。光源氏に何かされたの？」
「光源氏？私は田中諒くんと話をしたのよ」
「だから、それが光源氏なのよ。あんた知らないの？噂の話」
なんとなく、聞いたことがある噂を思い出す。
「ふぅん、そうなんだ。噂の人とは知らなかった。普通の人だよ」
「でも、連れて歩く女の子がしょっちゅう変わるんだよ。それってどうなのよ」
「どうなのよって言われてもリョウ君にはリョウ君の事情があるでしょう？」
さっき、ちょっと話をしただけの男の子が噂の相手だと初めて知った。
皆がおもしろ可笑しく言っているのとはなんか違うような気がする。
もっと穏やかな、平凡だけども、野に咲く花のような感じだ。
そこにいて当たり前なんだけども、いないとちょっと寂しいような。

「で、どんな話したのよ」
「私が勘違いしてリョウ君を怒っちゃったの。それだけよ」
「りおはそそっかしいからね…やっちゃんたんだ…」

「うん、そうなのよ。恥ずかしかったわ」
「そういえば、今日は自転車は？」
「寝坊したから、バスで来たのよ」
そう、私は思い切り寝坊してしまって自転車だと遅刻になってしまう所だった。
「じゃあ、帰りもバス？」
私は首を縦に下ろした。
「そう、じゃあバスの時間までは一緒にいてあげるね」
「ありがとうさつき。でも…勘違いした私をリョウ君は怒らなかったの」
「そう？彼にとってはそんなものな程度なんじゃない？彼の家って近いんだ」
「うん、裏門の前の家だったの」
「羨ましいね、家が近いのだけは」
「そうだね」
私たちは教室に着いたので、これ以上彼の話を止めた。他のクラスメートの
話の輪に加わった。

ｓｉｄｅ　リョウ

「田中。おはよう」
「おはようございます。斉藤先生」
「ところで、裕貴は今日はいるか？」
「多分、早くはないでしょうけど。母ならいますよ」
「晴香ちゃんか…晴香ちゃんでもいいから行こうかな」
「言っておきますね。本当に斉藤先生って二人の同級生だったんだ」
斉藤先生は、両親と同級生。俺は親父達同窓生の中では一番早い子

供らしい。
「後で昔の写真見るか？こないだ橋本先生が見つけたらしいぞ」
「…橋本先生ですか…俺ちょっと苦手で…」
「ハハハ。別に校則破ってないだろう？大丈夫。先生、お前が入学した時
すげぇ喜んでいたんだぜ。ここだけの話にしくれな」
「いいですよ。その位」
「お前、どうしてここにしたんだよ？お前の学力なら他もあったろ？」
「うーん、両親が3年間過ごした学校に行ってみたら分かるような気がしたんだけど」
「何が？」
「恋って何なのか」
俺がそう言うと斉藤先生はお腹を抱えて笑いだした。
「おっまえ、本当にあの夫婦の子か？学校では教えられないが、お前なら答えが
出ていると思ってたぞ」
「そう言われると俺も困るんですけど。分からないんですよ」
俺はほとほと困っている表情を浮かべた。

「そっか。悪かったな。でも、恋は落ちるものだと思うぜ。焦ってもいい答えは
出るとは限らないぜ」
「まぁ、あの二人が高校卒業してすぐに入籍するとはな」
「記念日って卒業式だったんですか？」
「そうだよ。俺らの目の前で婚姻届書いて、校長先生と橋本先生にサイン貰ったはず」
「付き合ってたんですよね？あの二人」
今まで聞いたことない話だから、もっと話を聞きたい。

「付き合っていたけど…皆が知ったのがかなりたってたからな」
「バカップルじゃないんですか？」
「校内で手をつなぐなんて…あの二人には罰ゲーム級だったからな」
俺は首を思い切り捻る。俺が知っている二人はいつでもくっついてる。
「まぁ、いろいろあるんだよ。彼氏と彼女でも。夫婦でも…な」
そうなんだ。何かがあったから今の二人な訳か。
「じゃあ、お前はまだ初恋以前なんだな。俺はお前の初恋も見れるんだ
裕貴には教えてやらねぇ。皆のアイドルを奪ったんだしな」
斉藤先生から聞きなれない言葉が出た。皆のアイドルって…誰？
「あれ？知らない？中央高校の初代のミスは晴香ちゃんなんだよ」
そんなの知らない。親父たちが入学の年に開校した位しか知らない。
「先生も1期生なんだよね」
「なんだ？その目は。俺はおじさんか？」
斉藤先生は俺の頭をぐりぐりする。痛い、痛いから。
「まあ、いいや。リョウ、恋ってのは案外近くにあるからな」
そういうと先生は職員玄関に吸い込まれていった。

案外近くにあるのが…恋。コンビニみたいなものか？
先生の一言が有難いというか、俺を余計に混乱させるだけだった。

初恋以前３（後書き）

両親の同級生だった斉藤先生登場です。
たまに高校生だった二人を暴露してくれるでしょう。
親と同じ高校に行っても…初恋は見つかりません（多分）

初恋以前４（前書き）

少しだけクロスオーバーします。でも必要以上に被りません。
（そうです、あの人が被るのです）

初恋以前４

「お前さ、ずっと先輩だけ見てるんだって？」
掃除の時間。一つ年上の先輩を一途に恋しているという哲に聞いてみた。
「告らないから、ビビリと思ってるのか？」
「まさか」
俺はほほ笑んで哲を見た。正直言うと羨ましい。
「まさか？」
「俺…恋したことないんだよ。だからまっすぐ一人の人を見ていられる
お前が羨ましくてな。俺にはまだその人が来ないらしい」
「そっか。それはそのうちやってくるさ。お前って噂とは違うんだな」
「親しくなる人には良く言われるよ」
「そういえば、お前の母親の翻訳本をお袋が読んでたぜ」
「それは有難いな。帰ったら母さんに言っておくよ。まぁ、最近は少女小説家の方がメーンでな。いろいろ…あるんだよ」
「それってはるかって名義の本か？真美も読んでるぜ」
「その通り。その為の女子高生の取材として家でお茶会してるんだよ」
「だから帰宅時に女の子が一緒なのか。それはそれで残念だな」
「あぁ。訂正するのも面倒でな。今度出る本サインつけて渡そうか？彼女に」
滅多に親のことを話すことはないんだが、珍しく自分からカミングアウトした。
こいつって、不思議な魅力があるな。いい奴みたいだし。

「本は俺が渡すからな。いいか、絶対だぞ」
掃除が終わると、哲は一目散で教室に戻った。
彼女が絡まないと、すごくタッパもあってかっこいいのに…。
彼女が絡むと目じりが下がって…人が変わる。彼女>自分なのがよく分かる。
一人でのんびりと廊下を歩く。
教室の前で隣のクラスの女の子が立っていた。

「田中君…あの…好きな人っている？」
「好きな人…いないよ。どうして？」
「じゃあ、なんでいつもあんなに女の子が群がってるの？」
「さあ？本人達から聞いてみたら？」
本当の理由は知っているけれども、説明するのが面倒臭い。
「そう…分かった…さよなら…」
そう言うと女の子は帰ってしまった。…一体、何がしたかったんだ？

「リョウ、今のは良くないんじゃないか？」
「そ、そうなのか？先生」
荷物をまとめていると、斉藤先生が立っていた。
「晴香ちゃんに巻き込まれているって説明すればいいじゃないか」
「そうなんだけども、本当に嫌なら家に入れるなって俺が言えばいいだけだろ？」
「でも、言わない訳はなんだ」
「人の恋バナがただで聞けるから」
先生はがっくり肩を下ろしていた。
「人の話を聞いて耳年増になるのはどうなんだ？そっちの方が問題だぞ」

「分かった…少しだけ考えてみる」
「俺、もう帰れるから一緒に帰るか？」
「いいですけど。荷物を置いたら買い物行くんで、ごゆっくり」
「じゃあ、俺は裏門で待ってるな」
斉藤先生は教室から出て行った。

やっぱり、恋って難しいな。俺にはハードルが高くないか？

初恋以前４（後書き）

おっと、哲が登場です。リョウにとっては恋愛の達人らしいです。

しかも、恋の駆け引きすらできてません。

初恋以前5

買い物帰りの俺は、家の前の坂美都を自転車で登っていた。
家の少し手前のバス停には今朝見た顔があった。りおちゃんがいる。
どうしようかな？声位かけてもいいよね？

「りおちゃん、どうしたの？」
「うわぁぁぁ」
りおちゃんは俺に気が付いていなかったようで、驚いてよろめいている。
「大丈夫？」
「リョウ君？買い物に行ったんだ？」
りおちゃんは自転車の籠一杯の俺の荷物を見ている。
「うん、りおちゃんはバスがないの？」
「そうなの。今の時間って1時間に1本で…一足遅かったみたいなの。
歩いて帰ろうかどうしようか悩んでいたの」
歩いて帰れない距離じゃないんだ。中学では一緒じゃないから近隣なんだろうな。
「それだったら…俺の家に来る？バスが来るまで待っていたら？」
「いいの？だったら…お邪魔しようかな？邪魔じゃない？」
「大丈夫だよ。お茶飲んで宿題やったら？時間は有効に使おうよ」
俺はりおちゃんに向かってにっこりと笑いかけた。
「本当にいいの？」
「理生ちゃんは気にしすぎ。もうちょっと気楽にいこうよ」
俺はそう言うと、理生ちゃんを連れて家に帰ることにした。

「ただいま。ごめん。ダイニング使うからな」
そう言って俺は家に入る。
「すみません。おじゃまします」
りおちゃんは、恐る恐る入ってきた。家には鬼も化け物もいないぞ。
「両親はいらっしゃるの？」
玄関の靴を見て言ったんだろう。あの靴は父さんのじゃないからあいつのだ。
「いや、母さんはいるけど…アレは来客というかオブジェだから気にしないで」
俺は右手を出して彼女の手を取った。彼女は慌てて手を引っ込めた。
「分かったから…」
「おいでよ。りおちゃん。うちは人の出入りが多いんだから」
「そうなんだ」
りおちゃんが、気を使う素振りをする。個人的には控えめな女の子って
ポイントが高い。
「一応、母さんに挨拶する？」
「挨拶しないって失礼じゃない？当然でしょ？」
俺はりおちゃんを連れてリビングからに入った。ダイニングはリビングに繋がってはいるけど
会わないで入ることもできるけど、りおちゃんは嫌だろうしね。

「ただいま、母さん…何やっているんだよ？」
「お帰り…リョウ。あのね…桃鉄やってる。最近一緒にやってくれないんだもの」
「お帰り…リョウ。お前も…って山川、どうした？」
りおちゃんはこの光景をキョトンとして見ている。
「直樹さん、８組の担任だもんね。りおちゃん、桃鉄やって現実逃避しているのが

俺の母さん。父さんは仕事でまだ帰ってこない。」
「山川、俺は晴香ちゃんと高校の同期なんだよ」
先生は、バツの悪そうな顔をして見ている。いつもは直樹さんと呼んでいる。
学校にいても、いつも直樹さんと読んでしまいそうになってヒヤヒヤするから
俺は直樹さんに近づかない。
「こいつって、俺に話しかけてくれないんだぜ。俺がリョウのおむつ替えたりミルク
やったりしたのにさ」
「うるせぇ。その話は嫌って程聞いたよ。もうボケ始めたか？りおちゃん、君の担任は
こんなにも恩着せがましいんだぜ」
「先生…話は聞いていないことにしますね」
「おっ、山川はいい子だなぁ。先生は本当に嬉しいぞ」
直樹さんは、りおちゃんの頭を撫でた。スキンシップが過ぎないか？
本当にこいつ先生で大丈夫なのか？でも、こんなんでもキャリア１２年だったよなぁ。

「だからね、先生家まで送ってね。今日は車で出勤してたよね」
りおちゃんはにこやかに対価を要求していた。しかも送って行けだなんて。
どうする気だ？直樹？ヤバくね？
「何で…俺の家を知っているんだ？」
「先生の家のマンションの大家って私の祖母です。知ってると思ったのに」
りおちゃんは笑っている。その笑顔を見ると右側にエクボが出来るんだ。
女の子のエクボってかわいいな。

「じゃあ、お前の家って」
「同じマンションの最上階。よろしくね。ご近所さん。リョウ君ありがとう。
お陰でバスがいらなくなったみたい…ね？」
「良かったね。りおちゃん」

俺は、りおちゃんの前に紅茶と少し温めたスコーンを出した。
「スコーンはクリーム？それともジャム？」
「…リョウ君って海外生活があるの？」
りおちゃんは、紅茶を一口飲むと俺に聞いてきた。
「俺？ないよ。両親はイギリスに行ったことあるらしいけど…」
「俺は晴香ちゃんと一緒にイギリスに行ったな。いいだろう」
直樹さんは、ちょっと自慢げに俺たちに言う。
「でも、直樹さんって一度も父さんに勝ったことないんだろう？」
直樹さんの多分一番の傷口に少しだけ塩を塗ってみることにした。
基本的に仲はいいけど、元々はライバルだったらしいから。
「リョウ、おっ、お前って奴は…」
「リョウ、直樹君をいじめないであげて」
母さんが俺に向かって言う。今日の母さんは森ガールだ。まさにイギリスにいそうなカンジ。
今日の母さんのイメージは…若草物語か？赤毛のアンか？
「母さんの趣味も凄いだろ？このリビングも…」
うちのリビングは乙女全開だものなぁ。俺はもう慣れたものだけども。
「でも、素敵。女の子って憧れるのよ。実践すると…お金かかるんだもの」
りおちゃんはうっとしりながら母さんを見ている。

「りおちゃん、直樹君が送ってくれるんなら…お着替えしてみる？」
「ええっ、いいんですか？」
「大人の言うことには素直に甘えることよ。大人になったら甘えられなくなるんだから」
そう言うと、母さんはりおちゃんにウィンクをした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1744ba/

僕らの恋模様　～恋って何？～

2012年1月10日14時50分発行